

21 コーヒーの味

星野博美

大学一年生の時、家庭教師をしていた。八十年代半ばのことだ。

その数年前、歌手の山口百恵が三浦友和と結婚して芸能界を引退した。二人が新婚生活を送るマンションが一億を超えるといわれ、「億ション」という言葉が巷に流布した。

私が雇われた家は、まさにそんな億ションの中にあつた。品川駅から

徒歩数分で、プリンス系ホテルに挟まれた位置にある重厚な造りの高級新築マンション。当時珍しかったオートロック方式で、部屋番号を押して許可されない限り、建物の中には入れない。

エントランスに立って部屋番号を押すたび、許可を必要とする立場にとまどった。中に住むのは、許可されない限り会うことのできない人たちだ。

教え子は小学五年生の女児だった。苗字も名前も、もう覚えていない。「ユウコ」としておこう。高校時代の友達姉がその子の家庭教師をしていたが、就職が決まったため続けられなくなり、私に回ってきたアルバイトだった。

「とにかくこの子を、姉と同じ中学に入れてください」

それが母親から私に課せられたミッションだった。

ユウコちゃんは三人姉妹の真ん中だった。出来のよい長女が受験をして某有名大学付属中学に入った。次は彼女の番だったはずだが、両親はよほどせっかちとか心配性というか、翌年、三女をその付属の小学校に入れてしまった。姉と妹にその意識がなかったとしても、彼女は仲間外れ状態となった。必要のない劣等感を持たされ、親からは大きなプレッシャーを与えられていた。

次女に引け目を感じさせないよう、なんとしてでも同じ中学に入れたい、というのが親心なのだろう。それはいくぶん理解できるものの、子どもに対してあまりに配慮が足りない。自分も三人姉妹の三女だからよくわかるが、上から順番通りにすることは、子どもの尊厳にとって、

ものすごく大事なことなのだ。下が優先されると、上の子は疎外されたと感じる。動物の世界だって同じである。

お金欲しさに引き受けたアルバイトだったが、厄介な案件だというのが正直なところだった。

ユウコちゃんは短い髪がよく似合う、運動が得意そうな女児だった。まったく勉強する気がなかった。やる気がない、とは少し違う。明らかに怒っていた。

「そんな中学、行きたくないもん。あたしは区立の中学でいいんだもん」

それが彼女の口癖だった。

怒る子どもは好きだ。親の顔色を窺って言うなりに、その場を切

り抜けようとする子どもは、あとで自意識をこじらせて面倒な大人になる。そういう人を山ほど知っている。十歳という年齢で自我を持っているほうが、よほどガッツがある。私は彼女が気に入っていた。

しかし志望校の合否線下にいる彼女を合格させることが雇用理由である以上、彼女にやる気を出させないと私が御役御免になる。

「気持ちにはわかるけどさ、いいこといっぱいあるかもしれないから、がんばろうよ」

「先生は私立の中学に行つて、何かいいことあった？」

そう聞かれると、言葉に詰まった。

入ったその日から、一日も早くここから出ることにばかり考えていたよ……。立场上、それだけは言えない。

「わからない問題が解けると楽しいよ。もうちょつとがんばってみよう」

まったく弱腰の家庭教師だった。

勉強を始めて二時間が過ぎると、母親からケーキと飲み物が運ばれてきて、ユウコちゃんと一緒に食べるきまりになっていた。その日は「こちらへどうぞ」と居間へ通された。

これまで一度も姿を見たことのない父親が待っていた。四十そこそこのメガネをかけた男性で、いま帰宅したばかりのようだ。この若さで品川の一等地のマンションに住んでいるところを見ると、勤務先は一部上場企業とか会社経営など、あるいはもともと裕福なのだろう。

「先生、うちの子どうですか？」

挨拶もロクに済まないうち、ネクタイを外しながら父親は切り出した。がんばってます、と答えるしかなかった。

「本当ですか？ 成績、下がる一方なんですよ。やればできる子なんです、やる気がないのが問題なんです」

親という人種はよく言う。俺の子だから出来はいいはずだが、実力を出しきっていない、と。やる気がないこと自体が本人の意思表示だとは、気づこうともしない。

「うちは代々あそこの学校なんで、なんとか入れてもらわないと。うちの両親も、さすがに心配してます」

残業せずに父親が帰宅したのは、このためか。

家庭教師が替わったら成績が下がる一方じゃないか。おまえじゃ埒が明かない、俺が直接話す！といったところなのだろう。

祖母にまでプレッシャーを与えられているのか。いつもはケーキにかぶりつくユウコちゃんは、ケーキに手をつけず、フォークを握ったままじっと下を向いている。業績不振で家庭教師が責められるのは仕方ないが、少なくとも彼女の前でする話ではない。

「ユウコちゃんは大変利発です。将来が楽しみです」

「だったら、もっとハツパかけてくれないと。こっちだって安くない金払ってるんだから！」

突然口調がぞんざいになり、大学生の小娘をやりこめるエリートサラリーマンの傲慢さが感じられた。そして彼はカップに入った飲み物を一

気に飲み干した。

売られたケンカを買いいたい意欲がむくむくと湧き上がった。自分のためではない。ユウコちゃんの名誉のためにだ。

ケンカをするなら、急所を狙え。

何も情報を知らない初対面の男の、どこが急所だ？

いま彼が飲み干した、カップの中の液体だ、と直感した。

この半年間、勉強が終わると飲み物を提供された。しかし私にはその液体の正体がどうしてもわからなかった。

角砂糖とミルクが添えられているところを見ると、コーヒーか紅茶だと思われた。それがコーヒーだとすると薄すぎ、味も香りもしない。紅

茶だとしたら色が濃すぎるが、茶の渋みも香りもない。

多分、ドリップコーヒーだ。しかも、クソまずい。

代々有名校出身だか億ションだかどこぞの高級ケーキだか知らんが、あなたはこの液体のクソまずさにも気づかない、違いのわからない男だ。こう言えば烈火のごとく怒り、叩きだされるだろうと思った。ユウコちゃんがそこにいなければ、言っていた。しかし子どもの前で親に恥をかかせることは絶対にしてはいけない。言葉を呑みこんだ。

「もう遅いから、帰って頂きなさい」

父親はもはや私に話しかけず、間接話法でそう言った。

そして私は億ションを出た。

クビを宣告されたのはその数日後だった。しかも直接言われたわけで

はなく、友達の姉経由で知らされた。母親から頼みこまれ、社会人生活をしながら再びユウコちゃんを見ることになった、と彼女は申し訳なさをうに告げた。そして翌年、ユウコちゃんは中学に受からず、彼女もまた解雇されたのだった。

なぜ今日、突然、こんな昔のことを思い出したのだろうか？

そうだ。今朝ソファで、自分で入れたカフェラテを飲んでいたので。それがいつになく、格別においしかったのだった。